

学生NPO団体SPAC

運営部御中

# 第一回街頭演説共創プロジェクト イベント報告書

2025年9月1日

1. イベント開催の経緯
2. イベント開催前
3. 第一回共創セッション
4. 第二回共創セッション
5. 街頭演説(イン田町駅)
6. 第一回共創セッションレポート
7. 第二回共創セッションレポート
8. 総括

## 1. イベント開催の経緯

本団体は、若者の政治参加の促進と市民社会への主体的な関与を目的として、各地で街頭演説を行う活動を展開してきた。特に本年5月25日に姫路市にて実施した街頭演説は、SNSを通じて広く拡散され、当初の想定を超える大きな反響を得た。この経験は、私たちが「街頭」という公共空間で声を上げることの影響力を再確認する契機となった。単にその場に集まった聴衆だけでなく、オンライン空間を通じてより広範な層に問題提起を届けることが可能であると判明したのである。

この成功を踏まえ、当初は「街頭演説リレー」と題し、日本各地で順次街頭演説を行う計画を立てた。しかし、単なる連続的な演説の開催にとどまらず、より双方向的かつ参加型の取り組みとする必要があるのではないか、という問題意識が生まれた。そこで、広報部長である森下の提言に基づき、街頭演説の事前段階としてオンラインセッションを設けることとした。ここでは、参加者から日頃抱えている社会への疑問や課題意識を募集し、それらを整理・共有する。

そして街頭演説本番においては、単なる団体側の発信ではなく、オンラインセッションで寄せられた「市民の心根」を代弁する形で発信する方式に転換した。これにより、演説は「一方的に訴える」ものから「市民の声を預かり、それを社会に届ける」共創的な営みへと進化を遂げたのである。この新たな試みを「街頭演説共創プロジェクト」と改称し、以後の活動における大きな柱とした。

この方向転換は二つの意義を有する。第一に、若者を含む市民が自らの意見を安心して発信できる場を設けることで、参加のハードルを下げる点である。第二に、演説の場が「特定の団体の主張」ではなく「多様な市民の声の反映」であることを示すことで、活動の公共性と正当性を高められる点である。結果として、本団体の活動は、若者の主体的な政治参加を喚起すると同時に、社会に対しても「市民が共に作る政治文化」の可能性を提示するものとなった。

## 2. イベント開催前

当初、本プロジェクトは八月十五日に大阪での開催を予定していた。しかし、角田代表が道路使用許可を取得できなかったため、大阪での実施は断念せざるを得なくなった。そのため、事前のオンラインセッションは通常どおり行い、その後の東京での街頭演説にて執行する運びとなった。

開催延期の影響もあり、第二回街頭演説共創セッションを追加で実施した。この折、角田代表と森下広報部長は大阪城公園にて広報用の動画を撮影した。また、酒本部員の協力により、道路使用許可の申請を「キャンペーン活動」として行ったところ、手続きは円滑に認可された。

第一回街頭演説共創プロジェクトでは、開始前にスライド形式の広報を行ったが、動画は用いなかった。これに対し第二回では、第一回の反省を踏まえ、事前に撮影した広報用動画を毎日投稿し、備えを強化した。しかしながら、広報の改善にもかかわらず、第一回よりも参加者を集めることが難しく、その原因は依然として解明されていない。今後、十分な検討と研究が必要である。

街頭演説当日は、参加者は四名ほどであった。天候は非常に暑く、佐々木部員がダウンしてしまった。又用意した約百枚のチラシは一時間ほどで全て配布し終えてしまった。このことから、次回は三百枚程度の増刷が必要であると推定される。



### 3. 第一回街頭演説共創セッションについて

2024年8月15日(木)19時より、学生NPO団体SPACは第一回共創オンラインセッションを開催した。本会はディスカッション形式で行われ、参加者3名、運営3名、合計6名が出席した。

準備段階では、広報期間が約1週間と短期であったにもかかわらず、DMIによる個別勧誘が奏功し、必要な参加者を確保することができた。フライヤーや公式HPの内容は整っており、全体的な広報の基礎は固まっていた点は評価できる。大阪で予定していた街頭演説が中止となった影響で参加を見送った者もいたが、それでも一定の関心を引き込んだことは、団体としての発信力の芽生えを示している。また、参加者との直接的な接触を通じて信頼関係を築けた点は、今後の活動に資する基盤となろう。

当日の運営においては、ファシリテーターの説明がやや長く、また発言が長引いたことで時間配分が乱れる局面も見られた。しかし一方で、参加者全員が発言の機会を得られ、幅広い視点から意見交換が行われたことは大きな成果である。特に教育・若者の政治参加・社会保障・憲法・精神的健康といった多岐にわたる論点が自然に引き出され、学生が主体的に政治的課題を語り合う場を実現できたことは、本セッションの最大の意義といえる。

また、初対面の参加者同士であったにもかかわらず、互いに意見を尊重し合い、率直な議論が展開されたことは、SPACの掲げる「参加と協働」の理念を実地で体現した証左である。これは小規模開催であったからこそ可能となった良

い側面であり、少人数の強みを最大限に活かした運営であった。

総括すると、本セッションは広報・運営両面で課題を残したものの、同時に次へと繋がる多くの成果を収めた。短期集中の広報戦略は効果を見せ、議論の場では若者が主体的に政治や社会課題に向き合う姿勢を確認できた。これらは次回以降の活動を飛躍させるための強固な土台となろう。

今後の改善点としては、第一に広報の継続性を確保することである。SNSを通じた定期的な情報発信やイベント前の盛り上げ施策を導入し、潜在的な関心層を呼び込むべきである。第二に運営体制の強化として、ファシリテーターの事前準備やロールプレイ、タイムキーパーの明確な配置が必要である。第三に参加者満足度の向上に向け、議論テーマを段階的に展開し、終了時のまとめを丁寧に行うことが求められる。

#### 4. 第二回共創セッション

第二回共創セッションにおいては目立った問題は発生せず、各メンバーが前回の反省点を払拭できる内容だったと感じる。詳しい内容は本報告書のレポートを参照。

#### 5. 街頭演説(イン田町)

街頭演説当日は、角田代表が東京の自宅にて設営用機材を取りに行ったため、電車で遅れてしまい、予定通りの開始ができなかった。事前に街頭演説共創プロジェクトに興味を持ち、観覧に訪れた人は約4名であった。

演説は当初の予定より遅れ、開始は午前11時45分となったが、準備そのものは滞りなく進行した。この際、小野航大部員が差し入れてくれたドリンクの効果もあり、猛暑の中であったにもかかわらず熱中症患者は出ず、無事に進めることができた。

演説開始からおよそ30分で配布用のチラシはほぼすべて配り終えることができた。声を出しながらの呼びかけと同時にチラシを配布する手法は、通行人の関心を引く効果が大きく、集客や活動の認知度向上に寄与することが確認された。ただし、想定よりも早く配布が完了してしまったため、次回以降の開催においては、配布物の増刷や内容の多様化を検討すべきである。

また、演説の最中には通行人から直接声をかけられる場面もあり、「頑張ってください」といった激励の言葉は、現場の士気を大いに高めるものとなった。街頭という公共の場で直

接的な反応を得られることは、演説活動の醍醐味であり、オンラインにはない手応えを実感することができた。

当日は同時にライブ配信も実施し、常時5名程度の視聴者が接続していた。お昼の時間帯であったため視聴者数自体は多くはなかったが、現場に来られない人々にも活動を届けることができ、発信の幅を広げる上で意義ある取り組みであったといえる。

演説終了後には、参加メンバー4名のPV用動画を撮影し、広報用の素材として確保したのち、当日は解散となった。今後、これらの映像を活用してSNSや各種媒体で発信を行うことで、団体や活動の存在をさらに広く周知できるだろう。

今回の街頭演説は、当初の遅延という課題こそあったものの、現場の協力体制や参加者の機転により、大きな支障なく実施できた点は評価できる。特に、熱中症対策やチラシ配布方法の工夫など、現場ならではの実践知が得られたことは今後の活動に生きる。

課題としては、

- ①チラシ部数の不足、
- ②時間管理の甘さ、
- ③ライブ配信の視聴者数の限界、

が挙げられる。しかしこれらは改善可能なものであり、次回に向けて準備と戦略を強化すれば、より効果的な活動となるだろう。

総じて、今回の街頭演説は

「現場経験を通じて次に繋がる学びを得た第一歩」  
と位置付けることができる。

## 6. 第一回共創セッションレポート

### 1. 開催趣旨

本会議では、若者が直面する社会課題や教育、政治参加のあり方について率直に意見交換が行われた。各発言者が自らの経験や問題意識を語り、それをもとに共通テーマの整理を行った。

---

### 2. 発言者別整理

酒本氏は、大学進学における経済的負担の大きさを指摘した。特に兄弟が多い家庭では進学を諦めざるを得ない実態を示し、私立大学の高額な学費が進学を妨げていると訴えた。また奨学金制度が立替型であることから返済負担が重く、学生に過大な負担を強いている点を問題視した。さらに入学金の二重払い(約25万円)について「ほぼ脅しのように支払わされる」と述べ、この費用は国が負担すべきだと提案した。

森下氏は、社会を担うのはこれからの若者であるとの観点から、若者目線で物事を考える必要があると強調した。

三宅氏は、自身の病歴として気胸での入院経験を語り、若者の命の問題と政治を結び付けて考える姿勢を示した。自殺者の多さを深刻な社会問題として捉え、「生きていてよかった」と思える社会の実現を求めた。そのためには社会保障の拡充や、棄権者の声を政治に反映させる工夫が必要であると述べた。また、主権者教育の不足を指摘し、義務教育の中で主体的に学び、多様な進路選択を可能とする教育が不可欠だと訴えた。さらに、国の公的機関が本気で対応していない課題を多く挙げ、個性を大切にす教育と憲法遵守による戦争抑止の必要性を強調した。最後に「この国のオーナーはあなたである」と若者への呼びかけを行った。

角田氏は、若者の意見を政治に届ける仕組みが必要であると指摘した。

浅田氏は、「昔から日本が好きであり、誇れる国にしたい」との思いを語った。その一方で平和ボケの風潮を懸念し、若者の意見が本当に政治に反映されているのか疑問を呈した。具体的には、生産年齢からの選挙権付与や被選挙権年齢の引き下げを提案し、若手議員の増加を求めた。また政治活動に伴う金銭的課題を挙げ、教育制度の改革やトップダウン型の主権者教育の必要性を強調した。さらに意見をしっかり伝えることの重要性や、社会におけるタブーをなくすことの意義を説いた。

小栗氏は、未成年であった頃に政治活動の制限を受け、SNSで政治家の応援投稿さえできなかった経験を語った。これを踏まえ、公職選挙法の改正を求めた。また若者活動家や学生団体職員の交通費補助の緩和を訴えた。さらに、過度な外国人排斥が蔓延する現状を批判し、理性的な思考の重要性を説いた。教育については主権者教育の充実を求めたが、教員への負担が課題となる点も指摘した。防災分野では、能登半島地震を例に挙げ、避難環境の劣悪さや復興の遅れを取り上げた。共助の仕組みを社会に根付かせる必要があるとし、パニック防止のための知識普及や子どもへの防災教育の重要性を訴えた。

菊岡氏は、「政治的批判とは何か」というテーマで、自らの記事を基に論じた。批判には根拠が必要であり、発言者は説明責任を負うべきであるとし、受動的ではなく能動的な姿勢が求められると述べた。参考記事のURLを提示した。

佐々木氏は、自身のいじめや自殺願望の経験を共有した。小学校6年生で不登校となり、中学2年生で相談した際には陰口や噂に晒され、逃げざるを得なかったと語った。本気で対応する大人がいない現実を批判し、ネット以外に頼れる場所がない状況を示した。一方で、ガードマンや友人の親に救われた経験も語り、理解者の存在の重要性を訴えた。教育制度への提言としては、義務教育の中で自殺願望を抱かせない仕組みづくり、親や先生が適切に対応できる環境整備を挙げた。

---

### 3. テーマ別整理

教育や主権者教育については、三宅氏が主体的学習や多様な進路の重要性を訴え、浅田氏が教育制度改革を主張した。小栗氏も主権者教育の必要性を語ったが、教員負担への懸念を併せて提示した。佐々木氏は、いじめや自殺予防教育の強化を求めた。

若者の政治参加に関しては、森下氏と角田氏が若者の意見を政治に反映させるべきだと訴えた。浅田氏は選挙権・被選挙権年齢の見直しを主張し、小栗氏は未成年者の政治活動制限の緩和を求めた。

社会保障・生活支援の分野では、三宅氏が社会保障の拡充を主張し、小栗氏が防災・共助体制の必要性を語った。

経済や学費に関しては、酒本氏が学費負担軽減、奨学金制度改善、入学金の二重払い是正を求めた。浅田氏は政治活動の資金的課題を指摘し、小栗氏は若者活動家の交通費補助緩和を求めた。

憲法・安全保障に関しては、三宅氏が憲法遵守による戦争抑止を主張し、浅田氏と小栗氏が平和ボケへの懸念を表明した。

精神的健康や命の尊重に関しては、三宅氏と佐々木氏が自殺防止の必要性を訴え、「生きていてよかった」と思える社会づくり、相談環境の整備の重要性が強調された。

#### 4. 考察

第一回の議論では、教育と若者の政治参加が中心的テーマとして浮かび上がった。学費負担や奨学金制度の不備、不登校やいじめの深刻さが具体例として提示され、若者にとって「生きやすい社会」をどう構築するかが強く問われた。

特に印象的であったのは、佐々木氏や三宅氏が命の問題を切実に訴えた点である。これは単なる制度論にとどまらず、人間の尊厳や「生きる意味」に直結する議論であり、政治が真正面から取り組むべき課題である。

また、酒本氏による学費・入学金問題や、小栗氏による未成年の政治活動制限、防災環境改善の提起は、若者特有の現実的課題として説得力を持っていた。

総じて第一回会議は、若者自身の切実な体験や問題意識を土台にした具体的な議論が展開され、「若者の声を政治へ」という活動目的にふさわしい第一歩となった。

## 7. 第二回共創セッションレポート

### 1. 開催趣旨

2025年8月22日(金)、オンラインにて東京での街頭演説に向けた共創イベントが開催された。本会議では、参加した学生や若者が社会課題や演説に盛り込みたいテーマを率直に共有し、さらに今後の組織運営や活動の方向性についても議論が交わされた。

---

### 2. 発言者別整理

森下氏は、若者が生きづらい社会を改善する必要性を訴えるとともに、行政と企業の連携による若者支援の仕組みを提案した。また「平和とは忍耐と対話である」と語り、街頭演説を通じて共感を広げたいと強調した。

三宅氏は、若者が生きがいを持てる社会の実現を目指すべきだと主張し、特に自殺問題と主権者教育の必要性を強く訴えた。さらに、SPACは「社会への思いが濃い」団体であると述べ、共に創り上げていこうと参加者に呼びかけた。

佐藤氏は、航空系進学に必要な約2000万円もの学費に強い問題意識を示した。さらに不登校問題についても言及し、きっかけづくりや適切な対応の重要性を訴えた。そして

SPACへの加入を希望し、「人数を増やすことが大事」と強調した。

ゆうし氏(三郎)は、水道光熱費の高騰を「生存権」の侵害として位置付け、憲法的な観点から生活基盤の問題を訴えるべきだと述べた。演説においてもこの視点を前面に出すことを提案した。

高島氏は、地方教育の画一性に問題があるとし、とりわけ工業系人材の進路が制限される現状を指摘した。

酒本氏は、普通高校における自由度の低さを問題視した。

小野氏は、家庭以外にも安心して過ごせる「居場所」の必要性を訴えた。また、LGBTQや不登校の生徒が「当たり前」として受け入れられる社会を目指すべきであり、知識不足による偏見をなくす努力が必要だと述べた。

佐々木氏は、自らの虐待経験を踏まえ、虐待を減らす社会を築くことの重要性を訴えた。また「一人でも幸せになれる社会」を掲げ、周囲の傾聴の姿勢が大切であると主張した。さらに、いじめや家庭問題を含む自身の不登校経験を共有し、不登校や自殺問題の深刻さを訴えた。加えて、10月頃に「不登校の子イベント」をオンラインで実施する計画を示した。

小山氏は、不登校や自殺問題の背景には親の教育不足があると指摘し、親世代への教育の必要性を強調した。そして自身もSPACへの加入を表明した。

---

### 3. テーマ別整理

教育や主権者教育に関しては、三宅氏が自殺予防と主権者教育の必要性を訴えたほか、高島氏が地方教育の画一性、酒本氏が普通高校の自由度不足を指摘した。佐藤氏、小野氏、佐々木氏、小山氏はいずれも不登校問題を取り上げ、小山氏は親世代への教育が不可欠であると述べた。

若者の生きづらさに関しては、三宅氏が生きがいのある社会の必要性を訴え、小野氏が居場所づくりを求め、佐々木氏が虐待防止を呼びかけた。また、ゆうし氏は水道光熱費を生存権の問題として提起した。

平和については、森下氏が「平和とは忍耐と対話」との考えを示し、他のメンバーも星空や自然、相互理解など多様な平和のイメージを共有した。

組織や活動に関しては、佐藤氏と小山氏がSPAC加入を表明し、佐藤氏は人数拡大の必要性を強調した。三宅氏はSPACを「社会への思いが濃い団体」と表現し、共に活動を深めていこうと呼びかけた。今後の活動として、佐々木氏とのスライドを9月7日に投稿する計画も確認された。

---

#### 4. 考察

今回の共創イベントでは、「若者の生きづらさ」が大きな共通テーマとして浮かび上がった。自殺、不登校、虐待、教育格差といった問題が多く共有されたことは、現代社会が抱える若者課題の根深さを改めて示したものである。特に「生存権」という憲法的枠組みから生活基盤の問題を捉えた意見は、演説テーマの中心軸となり得る新鮮な視点であった。

また、「不登校の子イベント」の具体的な計画が示されたことや、新規加入希望者の存在は、SPACの活動が着実に広がりを見せている証左である。一方で、会議終了のタイミングに混乱が生じた点から、今後は進行体制の改善も必要である。

## 8.総括

第一回から第二回に至る「街頭演説共創プロジェクト」の流れを俯瞰すると、学生NPO団体SPACが掲げる「若者の声を政治に届ける」という理念が具体的に形を取り始めていることが確認できる。姫路での成功体験を契機に、単なる街頭演説の連続開催から「共創型」の試みに舵を切った点は大きな転換であり、団体の公共性と正当性を強化する戦略として評価できる。オンラインセッションを通じて事前に市民の意見を吸い上げ、それを演説に反映させる仕組みは、政治的主体性を促すと同時に、活動を「団体の発信」から「市民との協働」へと昇華させた。

第一回セッションでは、教育・主権者教育、若者の政治参加、社会保障、経済負担、精神的健康といった幅広いテーマが自然に引き出された。特に三宅氏や佐々木氏が語った自殺問題やいじめ経験は、制度論に留まらず「生きる意味」や「尊厳」と直結する重い問題意識を提示した。また、酒本氏による学費・入学金の問題、小栗氏による政治活動制限や防災環境改善の提起は、若者ならではの切実な現実感を伴い、議論に具体性を与えた。少人数ながら参加者全員が発言でき、互いの意見を尊重する雰囲気構築された点も大きな成果であり、SPACの理念が実地で体現された瞬間であったといえる。

第二回セッションでは、第一回の反省を踏まえ、より整理された議論が展開された。「若者の生きづらさ」が主要テーマ

として浮かび、不登校、虐待、教育格差、学費負担といった問題が参加者の体験を通じて共有された点は注目に値する。また、ゆうし氏が水道光熱費問題を「生存権」から訴えるべきとした視点は、生活課題を憲法的基盤に位置付け直す独自性を持っており、演説テーマの方向性を具体化させる契機となった。さらに、SPACへの新規加入希望者が現れたことは、活動の理念が新たな共感を呼び、組織拡大に繋がっていることを示している。

街頭演説本番では開始の遅延やチラシ不足などの課題が残ったものの、猛暑の中での機転や通行人からの激励、さらにはオンライン配信による発信の広がり、活動が「現場の手応え」と「デジタルでの拡散」を両立させている証左である。第一回から第二回にかけて得られた知見は、次なる演説活動をより効果的かつ持続的なものにするための貴重な資源である。

総じて本プロジェクトは、単なる演説活動を超え、若者の主体的政治参加を制度化する試みとしての萌芽を示した。「生存権」「教育格差」「不登校・虐待」「若者の政治参加」といったテーマ群は、今後の演説の核となると同時に、SPACが目指す「市民と共に作る政治文化」の具現化へとつながるであろう。

以上 角田代表理事